

記憶の継承を目的とした動画作成による シビックプライド涵養に関する研究

田中 尚人¹

¹正会員 熊本大学准教授 熊本創生推進機構 (〒860-8555 熊本市中央区黒髪2-39-1)
E-mail:naotot@kumamoto-u.ac.jp

熊本地震から三年が経ち、被災経験の風化が問題となる中、木山中学校における記憶の継承を目的の一つとして「復興は木山中からプロジェクト」が実施された。本プロジェクトは、木山中学校一年生が、「益城町のいまを未来に伝える」動画を作成するものである。本研究の目的は、この実践過程を整理し、授業の計画意図と創意工夫、その効用について明らかにすることである。そのため2018年度、2019年度の二年分の授業実施データを整理し、2019年度の授業前後に取った生徒たちへのアンケートを分析した。研究の結果、自らが住まう地域の風景の中で自分たちの考えを表現し、誰かに伝えるという活動が、シビックプライド醸成にいくつかの影響を与えることが分かった。

Key Words : civic pride, Kumamoto earthquakes, transmission of memory and experience, short movie

1. はじめに

(1) 研究の経緯

2016年4月14日、16日に震度7の大地震に見舞われた熊本県上益城郡益城町は、熊本市に隣接する人口33,611人(2015年国勢調査)の都市であり、平成28年熊本地震の被災地の一つである。益城町には、小学校が5校(広安、広安西、益城中央、津森、飯野)、中学校が2校(益城、木山)あり、高等学校はない。2つの中学校は、熊本市に接する町東部の市街地に益城町立益城中学校が、西原村に接する町西部の農村地域に益城町立木山中学校(以下、木山中と略)が立地している。

この木山中にて、熊本地震の翌年、2017年度から校長先生となった河瀬先生は、「復興は木山中から」をキャッチフレーズに生徒や先生、地域の方々とともに、木山中学校の復興に尽力してきた。この木山中では、熊本地震後校舎等も損壊し生徒たちの学習に支障をきたしていたことから、2016年の10月頃からNPO法人カタリバが学習支援を行ってきた。

2018年7月18日、益城町立木山中学校の教頭先生である中山先生とNPOカタリバの井下友梨花氏が来校され、以下の内容が筆者らに伝えられた。

- ・木山中にて熊本地震を経験した、当時の一年生たちが今年で卒業するので、生徒同志で記憶の継承がしたい
- ・学校として何かの流れを作りたいとの思いがある

- ・平成29年度の一年生担任団の多くが1、2年目と若く、もっと生徒と一緒にチャレンジして欲しい

また筆者は、2017年8月より「平成28年熊本地震記憶の継承」検討・推進委員会の委員として、熊本地震の記憶と経験を風化させず、未来の財産として継承していく活動に努めている。

(2) 研究の目的

本研究は、2018年度、2019年度の二度、益城町立木山中学校にて実施された、生徒たちが地域の今を未来に伝える動画を製作する「復興は木山中からプロジェクト」という総合学習の時間の学習活動を対象としている。

本研究の目的は、「復興は木山中からプロジェクト」の実践過程を整理し、授業の計画意図と創意工夫、その効用について明らかにすることである。

(3) 既往研究と参考文献

本研究ではシビックプライドを、伊藤らが提唱する「市民が都市に対してもつ自負と愛着」¹⁾に従い、「人々が地域に対して持つ、愛着や誇り、自負」として、そこには、自分が持つ「愛着」から、他者を意識した「誇り」、そして何かしらの関与に基づく「自負」というシビックプライド醸成の段階が見られる²⁾。

研究対象である「復興は木山中からプロジェクト」は、中学生によるグループワーク演習と考え、以下のような

地域学習に関する研究を参考とした。また、ワークショップ（以下、WSと略）デザインに関する参考文献をあげた。

地域学習に用いられた教材についての提案に関する研究として、菊池³⁾、鈴木ら⁴⁾の研究が挙げられる。これらの研究では、教材を評価し効果について考察している。シビックプライドについては、引地ら⁵⁾の研究が挙げられる。そこには、地域の肯定的な印象を持つことが、地域の愛着形成に寄与すると論じている。地域学習を通して、地域を知ることにより、肯定的な印象、意識を持つことができ、シビックプライド形成に繋がる。

これまで筆者らが実践してきたワークショップのデザイン⁶⁾に加え、前田が著書『まんがで知る教師の学び』シリーズ^{7,8,9)}にて、「能動的で対話的な深い学び」とされるアクティブ・ラーニングについて多くの知見を整理しており、授業のデザインに役立てた。また、苦野¹⁰⁾の教育哲学や、工藤¹¹⁾の中学校教育現場での実践なども参考とさせて頂いた。また、佐伯ら¹²⁾が重要視する「リフレクション（振り返り）」を本実践においても心掛けた。

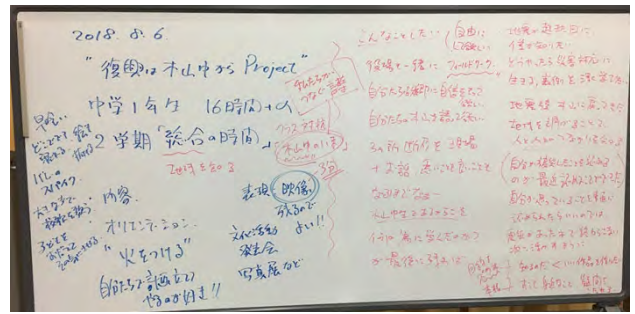


図-1 ミーティング時に使用したホワイトボード



写真1 プロチームの様子

写真2 自分PV試写

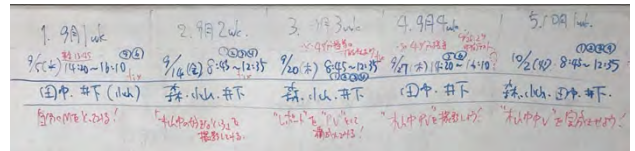


図-2 5週間分の課題とテーマ

2. 復興は木山中からプロジェクト2018の概要

(1) 木山中の先生方との事前ミーティング：2018.8.6

場所：熊本大学政創研会議室

参加者：田中（熊本）、中村（益城町役場）、中山、井尾川、島田、堀、和田（木山中）、井下、松本将、松本笑（カタリバ）以上11名

木山中の先生方と、最初のミーティングを実施した。

図-1のホワイトボードに、「木山中の今」、「自分たちに自信をもって欲しい」、「私たちがつなぐ言葉」など、授業中も大切にするようになった言葉が散見される。

筆者が最も印象的だった木山中の先生の発言は、「生徒たちに、（大人たちからの要望や課題に対してただ応えるような）やらされ感のない取り組みにして欲しい」というものがあつた。以降「自己肯定感」という言葉を、この取り組みでは意識した。

(2) 企画書作成：2018.8.11

まちなかで木山中教頭の中山先生と井下氏、そして「プロチーム」として「復興は木山中からプロジェクト」に関わるようになった、CM製作やマーケティングを専門とされている森克彰氏、プロカメラマンの小山紀之氏とミーティングを行った。筆者は8.14に『カメラをとめるな!』を鑑賞した後、以下の企画書を作った。

a) 概要

木山中学校の一年生に「木山中学校の今-伝えたい未来への言葉」と題して、熊本地震から二年が経った益城町や木山中学校、校区の「今」を、次世代や被災地に伝えるための映像作品（30秒程度のCMあるいはPV（Promotion Video）的なもの、できればストーリーがあるといい）を制作し発表する。このCM制作を通じて、生徒たちが熊本地震の経験を素直に受け止め、他者への思いやりや自己肯定心を育み、故郷への愛着やシビックプライドを涵養することを目的とする。

b) 時期：平成30年9月総合学習の時間（16h+α）

c) 場所：木山中学校及び校区

d) 体制

木山中学校：中山教頭先生、井先生：生徒指導

田中尚人（熊本大学）：統括マネージャー

井下友梨花（カタリバ）：現場マネージャー

森 克彰（エアーズ）：企画、プロデューサー

小山紀之（CINEMAD）：ディレクター、映像作家

e) 背景

益城町では、町民一人一人が熊本地震の記憶を継承する「平成28年熊本地震記憶の継承」事業を展開している。木山中学校生として被災した当時の一年生が最終学年となっており、このままでは木山中学校としての「熊本地震の記憶」が散逸してしまう懸念がある。中学生たちも、熊本地震に関して話す機会もなく、熊本地震からの復興の中に、自分を位置づけにくい状態にあった。

(3) プロチーム合流 : 2018.8.23

場所 : 熊本大学政創研会議室

参加者 : 田中, 森, 小山, 井下 (プロチーム) 福住, 中村 (益城町役場), 井, 尾川, 島田, 堀, 和田 (木山中), 山本, 松本笑, 松本将, 清野 (カタリバ) 以上 15名

プロチームはプロジェクト全体のマネジメントについて話し合い, カリキュラムを作成 (写真-1, 図-2) した. 木山中の先生方とカタリバの学生達には, 生徒たちに「30秒ワンカット動画」のイメージを共有してもらうための「自分PV」の試作 (写真-2) をお願いした. この自分PVが, 生徒達の心に火をつける, ことになった.

(4) 第1講 : 2018.9.5 (水)

田中, 井下, 森, 小山らが, 木山中3階の音楽室で生徒達を待ち構える. 始業のチャイムが鳴り生徒が入室, 学年主任板床先生の一括後, 趣旨説明. 「今日から, 約一ヶ月, 木山中学校の一年生と「木山中学校の今-伝えたい未来への言葉」と題して, 熊本地震から二年が経った益城町や木山中学校, 校区の「今」を, 次世代に伝えるための映像作品を作成します. 今日是一回目なので, まずはタブレットを使って, 30秒の「自分のPVを作ってみましょう!」 (写真-3)

OK GOやサカナクション等, ワンカットのPVをいくつか学習した後, 小山氏が編集したワンカットの極意VTRを見た. 「今回, 30秒とはいえカット割りの編集は難しいので, ワンカットというカメラを止めない撮影手法をとります」 VTRはとても分かり易く, 中学生たちの憧れのyou tuber らの事例もあり, 生徒たちも今から始まる事が理解できた. そして, 担任の先生たちが作成した「自分PV」を放映し, 大好評を得た.

授業開始, 白紙を一枚生徒たちに渡して, どんなテーマで30秒の自分PVをつくるのか文字にするように促したところ, 生徒達は皆考え込んでしまった. 考えを文字化するのは, まだ難しかったようだ.

「校内の好きな場所で撮影してくるように」と5時間目の残り20分ぐらいで, 生徒たちを教室から解放, 6人で一班をつくりタブレットを一台渡した. 6時間目の残り20分, 生徒たちが音楽室に戻ってきた. 「みなさん, 自分PVは, できましたか? いま, ここで上映してもいいっていう人はいますか?」という私の問いに対して, 「はいっ!」と二人の手が拳がった. そのうちの一人の作品を上映した時の写真が, 下の写真-4だ.

(5) 第2講 : 2018.9.14 (金)

二日目は, 1時限目から4時限目までの4コマ, 前回のPVの範囲を「自分」から「木山中」に拡張することが目標となる. この日の1時間目は森氏の講義. 広告の



写真-3 授業開始

写真-4 作品を見る生徒達

プロである彼は, 子ども相手でも高いレベルのことを本気で, 分かりやすく話した. 「広告という仕事をチームでしている」と, 以下の5項目について話された.

- デザイン : デザインとは, 視覚を誘導して, 情報を魅力的にみせること. 世界はデザインでできている, という名言があります. 何をみせるのか, 情報の優先順位を決めて, 視線を誘導し, 「これを見てね」とまとまりを示さなければなりません.
- 言葉 : キャッチフレーズなどのことをコピーと言いますが, このコピーは「つくること」はできない, 「選ぶ」のだそうです. 「やめられない!とまらない!」というかっぱえびせん有名なコピーがありますが, これなんか「美味しいですよ」とは一言も言っていません.
- 伝えるということ : 広告には「相手」がいるのです. 誰かを想って伝えたいことは, シンプルの一つにしぼる.
- 取材 : 広告の仕事は, 全ては「取材」から始まるのだそうです. 調べたり, 現場に行ったり, 考えたり.
- チームプレイ : 誰も一人で広告はつくれません. チーム (ディレクター, カメラマン, 音声さん, などなど) でつくるのです.

今から, 皆さんの通っている「木山中を取材してもらいます」, 皆さんは「木山中はどんなところ?」と人に聞いたり, 「木山中の仲間はどんな?」と考えたり, 「伝えたいことは何か」を一生懸命考えて下さい. 森氏の指導を受け, 各班はそれぞれで作戦を練ってから, 校内へ散らばっていった.

(6) 第3講 : 2018.9.20 (水)

今回から「木山中PV」の制作開始. 班ごとに, 何を伝えたいのか, 木山中, 校区にはどんな魅力があるのか, 伝えない内容をどんな風にみせるのか, 班ごとに作戦会議を行った. 15班全てが動画を作成するのは難しいという見方もあったが, 比較的早い段階から「15班全てに, 自由な作品を作って欲しい」と主張されていたのがプロの映像作家の小山氏だった. 小山氏は, プロジェクトの間は常に4Kカメラで現場を撮影し, 毎回生徒たちが撮影したデータを次回までに編集して, 生徒たちの復習用の教材をつくらせて下さった. 中学生を熱心に取材し, 「こんなのは好き?」「こういうのは, 面白いと思う?」と音楽や芸能人, メディアや遊びなど, 生徒たち

のことを一番深く把握しようとしておられたのは小山氏だった。生徒たちが撮影すると「ちょっと見せてもらっている？」と確認され、まず「これは、どうしたかったのかな？」と生徒たちの撮影意図に耳を傾け、「今どんな感じ？」と自己評価をさせ「こういう可能性もあるし、こんなやり方もあるけど、どうかな？」と決して自分の考えを押し付けるのではなく、生徒たちが自主的に考えるのを待っておられた。

(7) 第4講：2018.9.27 (木)

台風シーズンのこの時期に、たった2コマで15班分の現地撮影ができたのは、木山中学校の全先生方のご協力のおかげだった。そして益城町の地域の方々のご協力によるものだった。自転車で行ける生徒たちは自転車、車で送迎する必要がある生徒たちは、先生たちが分担して送迎し現場着。

どの現場に行っても、どなたか先生がしっかり現場を見守っておられ、本当に総力戦だった。どのチームも、「5, 4, 3, ○, ○, Q」とディレクターの指示で、カメラマンが撮影し、カチンコや小道具を作成し、オリジナルのストーリーで、素晴らしい作品を撮影していた。この日撮影した作品のうち、小山さんのOKが出たのは、15班中半数以下、他の班は再撮影を希望している、という状況だった。

(8) 第5講：2018.10.2 (火)

第4講からの一週間、井下氏が木山中、特に学年主任の板床先生と密に連絡を取り、どうやら再撮影可能という回答を得た。当初の予定では第5講は2コマで、全作品を見て最終回という予定だったのですが、4コマに増やし、最初に各班の作品を確認、OKが取れた班は文化祭の展示準備、OKが取れなかった班は再撮影に行く、となった。

各班とも、完全に一つのチームに仕上がっており、各班で計画を立て直しロケ地へ向かう。「復興は木山中からプロジェクト」全般、そして特に現場で一番活躍したのは、松本笑さんを中心としたカタリバの学生チームだった。毎回のタブレットからのデータ抽出、そして充電、生徒たちの撮影現場を回り、話し相手や相談にのったり、時にはふざけている生徒たちを叱ったり。木山中の先生方ともよくコミュニケーションをとり、プロジェクトを支えてくれた。カタリバのメンバーがよく使う「ナナメの関係」、縦ほど強くない、横ほど緩くない、ちょうどいい緩やかな連携の一つの形態であると考え。カタリバのメンバーが、ほとんど中学生と接したことのない、筆者や森氏、小山氏と中学生、先生方との間を結んでくれたおかげで、筆者らは安心して、中学生たちが30秒の動画を作成することに必要な知識や技術、学び方、作り方などを伝えることができた。



写真-5 木山神社での撮影



写真-6 秋津川での撮影



写真-7 文化祭での風景



写真-8 教室での展示

表-1 PVの撮影地

撮影場所	1組	2組	3組
1班	ミナテラス	木山神宮	木山神宮
2班	スーパーキッド	彼岸花街道	木山仮設団地
3班	木山神宮	ミナテラス	彼岸花街道
4班	テクノリサーチパーク	津森神宮	陸上競技場
5班	テクノリサーチパーク	秋津川沿い	旧益城町役場

(9) 文化祭：2018.10.14 (土)

文化祭の前々日、NHKの石井アナウンサーから14日は取材に参ります、との連絡を受けた。いよいよ文化祭当日、筆者らプロチームは5回目までの授業しかイメージしておらず、15作品を文化祭の出し物にするのかは木山中の先生方にご尽力頂いた。一方教室では、プロジェクトの全5回の講義がポスターにまとめられていた。

「復興は木山中から2018」生徒達が、かわるがわるプロジェクトの内容を説明する。「僕たち、私たちが伝えたい、益城町のいま」が30秒ワンカットの15本の作品になった。生徒たちが大好きなWANIMAの「ともに」とともに、板床先生が編集して下さった生徒とスタッフの全員の想いが詰まったPVが流れた。映像が終わり、拍手が鳴りやまない。半年前まで小学生だった中学一年生90人が、15班のチームになり制作した動画は、一つ一つに味があり甲乙つけ難く、前日に僕たちはすべての作品に評価のコメントをつけた。

3. 復興は木山中からプロジェクト2019の概要

(1) 二度目の挑戦

復興は木山中からプロジェクト2018にてプロチームとして活動した4人は、2018年度の活動以降も、次年度(2019年度)の「復興は木山中から」の内容について検討してきた。2019年度から、井下氏がNPO法人カタリバ

復興は木山中からプロジェクト2019 【1年部】		学年主任:松山先生		1組:川添先生, 2組:平野先生, 3組:植原先生	
・全体の工程管理は、本紙にて ・生徒たちの振り返りや学び、を記録するために「振り返りシートはポートフォリオ形式で」 ・昨年度からの改良点:「より、深く考える」木山中校内の撮影とすることで、ポジティブな効果も				1時間目 8:45~9:35	5時間目 13:20~14:10
				2時間目 9:45~10:35	6時間目 14:20~15:10
				3時間目 10:45~11:35	
				4時間目 11:45~12:35	
1年生:昨年度同様、30秒1カットの動画撮影を行う。※木山中校内の撮影に変更した(第2回後) ねらい:「益城町の今を、班員と協力し30秒1カットの動画として撮影することで、ふるさとについて学び、自分たちの思いを未来へ伝える。」					
	1. 9月第1週	2. 9月第2週	3. 9月第3週	4. 9月第4週	5. 10月第1週
日付	2019/9/11(水)3, 4限 集合:9:30	2019/9/17(火)3, 4限 集合:10:00	2019/9/24(火)3, 4限 集合:9:30	2019/9/30(月)1~4限 集合:8:15	2019/10/8(水)5, 6限 集合:8:15
コマ数(50分)	2コマ	2コマ	2コマに変更(現場撮影延期)	4コマ	2コマ
主担当	田中・井下・森・小山 井形・吉永・吉川・井上・山本	田中・井下・小山 井形・高松・松尾・井上	田中・井下・森・小山 井形・高松・古賀・池田・井上	田中・井下・小山 池田・高松・井上・山本	田中・井下・森・小山 井形・古賀・池田・高松
課題	・30秒1カット動画を理解する ・みんなで考える技術習得 ・木山中CMのシナリオづくり	・30秒1カット動画を撮影してみる ・作品を改善していく	9月23日 ・益城町の今を木山中にて考える ・ふるさとの30秒1カット動画を撮影してみる 30秒動画の設計図をつくる	「益城町の今」30秒1カット動画を、木山中校内で制作する	「益城町の今」動画を完成させる
イメージ	みんなで考える	撮影してみる	現場でつくって、考える		ふりかえる
成果物	各班で「木山中CM」の撮影場所、シナリオを作成	15班(6名@班)でそれぞれの木山中CM	「益城町の今」30秒1カット動画の試作品	「益城町の今」30秒1カット動画	ふりかえりシート
宿題	木山中CMのシナリオ	ふるさとの記憶集め、ロケ地、インタビュー候補先を考える	シナリオ、平面図の完成	できたこと、できなかったことの整理、修正点の絞り込み	
1コマ	3時間目(1, 2年共通)@体育館 ・田中「風景から、みんなで学ぶ」15分 ・森講義「伝える」30分	3時間目:人芝集合 小山・井下 ・諸注意後、校内撮影(昨年度と同じタブレット)	3時間目@音楽室 小山・井下 ・前回の振り返り ・ワーク「ト書き、セリフ、平面図」	1時間目@音楽室 井下 ・前回の振り返り ・校内撮影	5時間目@音楽室 森・小山・井下 ・前回の振り返り ・校内撮影
2コマ	4時間目@音楽室 小山・田中 ・小山講義「30秒動画」15分 ・ワーク「伝えたい木山中の魅力」30分 田中	4時間目 ・校内撮影>12時音楽室集合 ・小山講義「動画撮影」10分 ・みんなで講評会(20分)	4時間目@教室 ・校内撮影	2時間目 ・校内撮影	6時間目@音楽室 ・できた班から、音楽室にて小山チェックを受ける、など ・振り返り
3コマ			※4回目までに、校内撮影の具体的なイメージ「一度中間報告をする」など、を先生方と共有しておく	3時間目@音楽室 ・できた班から、音楽室にて小山チェックを受ける、など ・振り返り	
4コマ				4時間目 ・ふりかえり	※カメラが15台しかないの で、1年生と2年生をずらして 実施

図-3 一年生のカリキュラム

復興は木山中からプロジェクト2019 【2年部】		学年主任:水田先生		1組:中尾先生, 2組:尾川先生, 3組:井先生	
・全体の工程管理は、本紙にて ・生徒たちの振り返りや学び、を記録するために「振り返りシートはポートフォリオ形式で」 ・昨年度からの2年生になつての改良点:「取材する」、「つなぐ」リレー動画」				1時間目 8:45~9:35	5時間目 13:20~14:10
				2時間目 9:45~10:35	6時間目 14:20~15:10
				3時間目 10:45~11:35	
				4時間目 11:45~12:35	
2年生:6人班で、インタビューに基づいた60秒1カットの動画を撮影し、クラスでつなぐMAP化する。 ねらい:「益城町の今を、班員と協力し60秒1カットの動画を撮影し、クラスでつなぐことで、ふるさとのストーリーにまとめ未来へ伝える。」					
	1. 9月第1週	2. 9月第2週	3. 9月第3週	4. 9月第4週	5. 10月第1週
日付	2019/9/11(水)3, 4限 集合:9:30	2019/9/17(火)3, 4限 集合:10:00	2019/9/24(火)3, 4限 集合:9:30	2019/9/30(月)1~4限 集合:8:15	2019/10/8(水)1~4限 集合:8:15
コマ数(50分)	2コマ	2コマ	2コマに変更(現場撮影延期)	4コマ	4コマ
担当	田中・井下・森・小山 井形・吉永・吉川・井上・山本	田中・井下・小山 井形・高松・松尾・井上	田中・井下・森・小山 井形・高松・古賀・池田・井上	田中・井下・小山 池田・高松・井上・山本	田中・井下・森・小山 井形・古賀・池田・高松
課題	・ストーリーとシナリオについて学ぶ	・ストーリーを紡ぐ ・クラスでストーリーを共有してみる	9月23日 ・各班で60秒1カット動画を撮影してみる ・各班で、次回撮影の準備	班で「益城町の今」60秒1カット動画を撮影してみる	10/7 2年生は各クラスで、班の試作動画をつないで見てみる
イメージ	みんなで考える	ストーリーをつくる	ストーリーを共有する	創る	ふりかえる
成果物	15班(6名@班)でそれぞれの60秒のシナリオを意識する	各班のシナリオをクラスで共有し、テーマを共有する	各班でストーリーが共有できるト書きとセリフ、平面図の作製	クラスでつなげた「益城町の今」60秒1カット動画	ふりかえりシート
宿題	各班のシナリオを考えてくる	各班のシナリオに沿った、ロケ地、インタビュー先の決定	各班で、翌週の撮影を具体的にイメージ	できたこと、できなかったことの整理、修正点の絞り込み	
1コマ	3時間目(1, 2年共通)@体育館 ・田中「風景から、みんなで学ぶ」15分 ・森講義「伝える」30分	3時間目@音楽室 田中・担任 ・「Howtomake30秒動画」15分 ・ワーク「班で伝えたいことを考える」30分	3時間目@PC室 森・田中・担任 ・60秒動画の要点(小山作) ・ワーク「シナリオづくり」ここから、班で	1時間目@PC室 田中・小山 ・前回の振り返り ・現地撮影(基本、ロケハン) ※ロケーションハンティングノ路	1時間目@PC室 全員 ・前回の振り返り ・現地撮影
2コマ	4時間目@体育館 森・井下 ・ワーク「昨年度のふりかえり」30分 井下 ・森講義「シナリオとは」20分	4時間目@クラス ・ワーク「クラスで伝えたいことを考える」20分 ・ワーク「班でロケ地、撮り方を考える」30分 ※タブレット操作	4時間目@クラス ・シナリオに沿って、校内で60秒動画を撮ってみる ・シナリオのブラッシュアップ	2時間目 ・現地撮影 ※班によっては、インタビューも可	2時間目 ・現地撮影
3コマ				3時間目 ・現地撮影	3時間目 ・現地撮影
4コマ		各組で共有されたテーマ 1組「益城町の人の多様さ」 2組「益城町の美しい自然」 3組「益城町の復興の具象」	※9/20第4回までに、15班がどこで撮影するのか、担任の先生方とプロチームの役割を相談しておく必要がある。	4時間目@PC室 ・みんなで動画を確認 ※小山さんが、2年生に向けて指導書を作成	4時間目@PC室 全員 クラスでふりかえり

図-4 二年生のカリキュラム

を離れ、益城町教育委員会の地域おこし協力隊に就任し、教育支援を担当することになった。

2019年7月1日、井下氏が、木山中の先生方（中山教頭、井、尾川、平野）とプロチームを引き合わせ、「復興は木山中からプロジェクト2019」が、現実のものとなった。中山教頭先生からは、文化祭で毎年三年生がやっている劇を見据えて、二年生には昨年度のワンカット30秒動画を超える何か、「インタビュー」、「人に伝えたいことを考える力」などのキーワードが提示された。

二学年一緒に授業を進めるのか、一年生、二年生それぞれの作品はどうするのか、特に、二年生は昨年度以上の成果として、クラス単位で取り組むのか、班での作業なのかを検討した。「二年生が一年生に教える」、「フットパスで風景を発見するような体験をして欲しい」、「益城町の食の紹介も行う」などのアイデアが出た。

8月11日には熊本大学工学部まちなか工房にて、8月20日は熊本大学にて、復興は木山中からプロジェクト2019に関するミーティングが開かれた。最終的には、9月8日に井、平野、植原、島田の4名の先生たちとともに、以下の通り、今年度の方針を整理した。

a) 大切にしたいこと

- ・前向きに、故郷の良さを考えてもらいたい。
- ・1人でやるのではなく、チームのみんなで作るのだということ。
- ・去年よりも、バージョンアップするのは「人の話を聞くこと」。
- ・去年も十分、ふるさつを見直して進歩したが、その先を見据えたい。
- ・今年はその先に、自己肯定感などにつながっていくと良いと思う。

b) 最終的な二年生の成果物(案)

- ・森さんにシナリオ作りを教えてもらう。
- ・それぞれが取りたいものを撮って、繋がるという楽しさを感じてもらう。
- ・マップでつなぐ。
- ・好きな風景を、ワープしてもいいので、つなぐ。
- ・60秒ワンカットで、クラス5班分をつなげる。

c) 最終的な一年生の成果物(案)

昨年度と同じく、基本的には、30秒ワンカットの作品を班ごとに作成。

d) 使用教室について

- ・一緒にする講義は体育館。ジンシバ（2階、3階にある人工芝のあるテラス）も活用
- ・一年生は音楽室。学年主任の先生が音楽担当。部屋は開く予定。
- ・二年生はパソコン室で集まれる。少し狭いが、もしくは教室で作業。

(2) 復興は木山中からプロジェクト2019の概要

2018年度に引き続き、2019年度もワンカット動画により益城町の今を未来に伝えることを授業の目標とした。

2019年度は、昨年度ワンカット動画を作成した一年生が進学して二年生となり、新たな一年生と二学年同時開講としました。一年生は昨年度同様、6人で班をつくり30秒ワンカットの動画をつくる。昨年度、動画づくりを経験している91名の二年生は、昨年度よりも1ランク上の動画づくりを目指し、6人一班でつくる動画を60秒に伸ばし、さらにその動画を5本繋げて、各クラスで1つのテーマを有した5分の動画にする、という新たな課題設定を行った。

昨年度の一年生は「自分PVづくり」から入ったが、今年は先生たちが作成した「How to make ワンカット動画：木山中CM編」を参考に、最初から「木山中PVをつくる」のシナリオづくりに取り掛かった。

二年生は、もう一度「益城町の今を風景として切り取る」ことの確認から、昨年度の振り返り、森さんから「シナリオ」についての講義を受け、60秒のシナリオづくりが始まった。

前頁に示した図-3が一年生の、図-4が二年生の5回分のカリキュラムである。赤字は、当初予定から変更になった場所を示している。

(3) 2年生のテーマと撮影場所【つなげ方】

1組：テーマ「益城町の人（の多様性）」
こころ保育園～益城中央小学校～木山中学校で喧嘩を仲裁～ラーメン屋で事件（校内で寸劇）～いこいの里（特別養護老人ホーム）【ジャンプつながり】

2組：テーマ「益城町の美しい自然」
木山中と益城中央小の間の道でカエルを探す～秋津川でカエルを見つけ、村上さんが川にはまる～塩井神社で水を飲み、村上さん発見～赤井の湧水でタニシを見つける、村上さんのお母さんに出会う～そうめん滝でカエルも見つけ、村上さんとも仲直り【カエルと村上さんつながり】

3組：テーマ「益城町の復興の具合」
吉本商店から果物の宣伝をYoutube風「復興チャンネル」にて～ましき食堂にてプーさんと食事～木山神宮で絵馬とお祈り～津森復興住宅にておばあさんとお話しをうかがう～益城くまもと空港にて紙飛行機が実際の機体に【紙飛行機つながり】

(4) 事前・事後アンケートの概要

2018年度に引き続き、2019年度もプロジェクト前後の二回シビックプライドの涵養に関するアンケートを実施して頂いた。アンケートの内容は3問で、一年生、二年生共通とした。

- Q1 (事前・事後) : 校区または益城町で、あなたの好きな場所はどこですか？
- Q2 (事前・事後) : 校区または益城町で、あなたが県外の人に自慢できるところ (もの、こと) は何ですか？
- Q3 (事前) : 10年後、あなたの校区または益城町は、どのようになっていると思いますか？
- Q3 (事後) : あなたが未来に伝えたい、木山中の「今」(魅力、大切なこと) は何ですか？

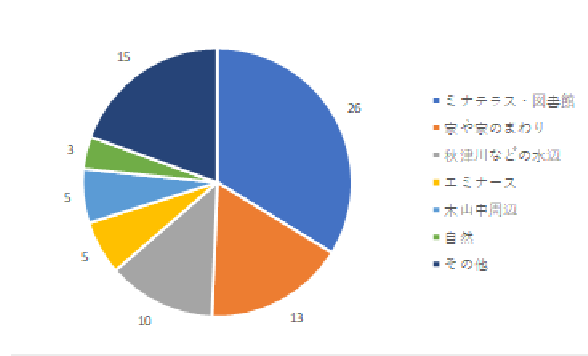


図-5 一年生・事前Q1 : 好きな場所

(5) 事前・事後アンケートの結果分析

a) 一年生、事前・事後アンケートの分析

Q1 : 「好きな場所」に関する事前アンケート (図-5) では、ミナテラス・図書館が最多で26人、次いで家や家のまわりが13人、三位が秋津川などの水辺で10人であった。事後アンケートでも、比率はあまり変わらず、木山中中学校内の「人工芝」や「体育館」を挙げる生徒が2名ずつ見られた。また「校区全部」と回答した生徒も2名いた。

Q2 : 「自慢できるところ (もの、こと)」に関する事前アンケート (図-6) では、第1位 : 自然、第2位 : 挨拶、第3位 : 地域の人たち、第4位 : エミナース、第5位 : スイカ、となっていたが、本プロジェクト実施後 (図-7) は、第1位 : 自然、第2位 : 挨拶、第3位 : 水・水辺、第4位 : 木山中 / 地域の人たち、と「水・水辺」と「木山中」を複数人が上げる変化が見られた。

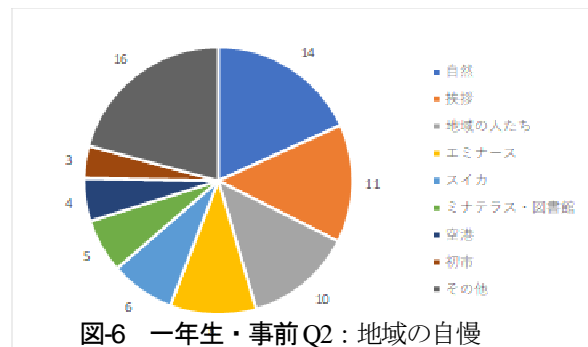


図-6 一年生・事前Q2 : 地域の自慢

Q3 (事後) : 「あなたが伝えたい木山中の今」は、

- ・生徒全員が元気で笑顔で挨拶ができる場所
- ・木山中の伝統や文化をそのまま残したい
- ・木山中は復興をしているという事
- ・前よりいい木山中になる
- ・先輩が受け継いで来た木山中の伝統
- ・タスキ、3秒礼、人工芝・のどかな田畑の景色
- ・古い歴史があること
- ・自分の身を守るためのタスキをちゃんとつけている事

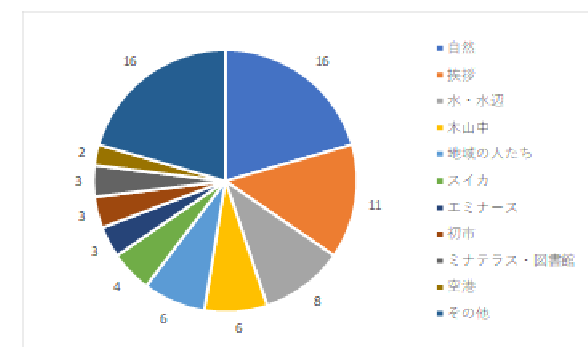


図-7 一年生・事後Q2 : 地域の自慢

b) 二年生、事前・事後アンケートの分析

Q1 : 「好きな場所」に関する事前アンケート (図-8) では、第1位 : 家 (自宅)、第2位 : なし、第3位 : ミナテラス・図書館、第4位 : エミナース、第5位 : 水辺、となっていたが、本プロジェクト実施後は、第1位は変わらず「家」、第2位に「ミナテラス・図書館」が13人、第3位 : なしは3人減り、第4位 : 水辺、第5位 : 彼岸花ロード / スーパーキッド、という変化が見られた。さらに、取材に行った益城中央学校や幼稚園、吉本商店、空港などを挙げる生徒も増えた。

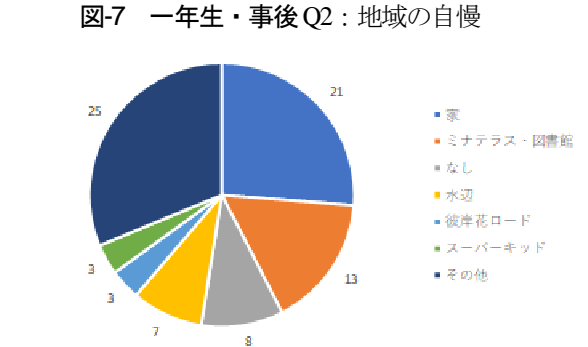


図-8 二年生・事前Q1 : 好きな場所

Q2 : 「自慢できるところ (もの、こと)」に関する事前アンケート (図-9) では、第1位 : 自然、第2位 : 水・水辺、第3位 : なし、第4位 : 挨拶、第5位 : エミナース、となっていたが実施後 (図-10) は、第1位 :

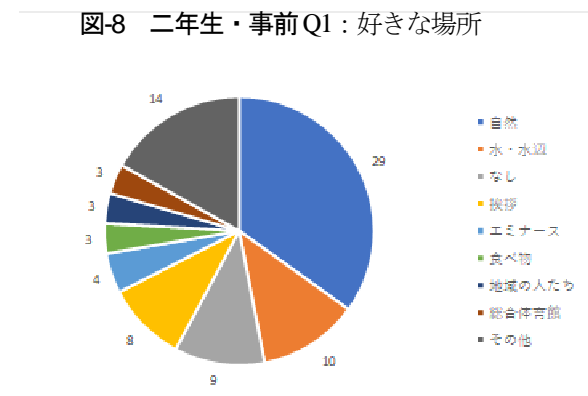


図-9 二年生・事前Q2 : 地域の自慢

自然は32名（3名増），第2位：水・水辺が12名（2名増），同じく地域の人々も12名（9名増）とベスト3までで，全体の8割を越え，まとまる変化を見せた。「なし」と回答した生徒は，一人増え，10名となった。

Q3（事後）：「あなたが伝えたい木山中の今」は，

- ・復興に向けて頑張っているところ
- ・益城町の人々の団結力や人柄
- ・未来でも「元気の益城町」でいてほしい
- ・益城町は「今」というこの時間を一生懸命に過ごしているところ
- ・水をキレイにする事。自然を大切にしている事。
- ・地震があったとしてもこんなに美しい益城町になったということ
- ・人の温かさ。自然の美しさ。そして復興の様子
- ・今，当たり前前にできていることに感謝すること。

4. おわりに

(1) 本プロジェクトにおける気づき

本研究では，復興は木山中からプロジェクトの実践過程を整理し，授業の計画意図と創意工夫，その効用について明らかにした。

2018年度のプロジェクトでは，以下の気づきがあった。

- ・中学校の先生方から，「やらされ感のない，能動的な学びの場」をつくる意思が感じられた。
- ・中学校一年生は，30秒ワンカットの動画を撮影するスキルを十分に有していた。
- ・授業の最初期では，これから行う活動について考えて，その内容を記述することは難しかった。
- ・動画撮影に入り，撮った作品をその場で確認できることは，生徒たちのスキル向上に役立った。
- ・すべての班で撮影がスムーズに進んだ訳ではないが，撮影が進むと，撮影する内容の議論が進むことには相関がみられた。
- ・校外に出て現場での撮影については，中学校の先生方のご協力により役割分担ができ，実施可能となった。
- ・個人情報の開示，生徒の学びに対する理解など，保護者や地域の方々への配慮について多くを学んだ。

2019年度のプロジェクトでは，一年生，二年生の二学年での授業実施になり，以下の気づきがあった。

- ・二年目となり，二学年での進行は，調整を要したが，学年ごとに話し合ってもらい，実施できた。
- ・二学年での実施で，最も調整が難しかったのは，撮影機材の準備と，撮影データの受け渡しであった。
- ・一年生は，昨年度のように校外へは出なかったが，木山中学校の魅力を十分に伝える動画が作成できた。

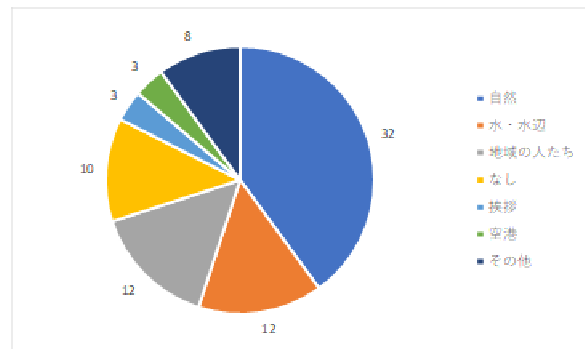


図-10 二年生・事後 Q2：地域の自慢

- ・二年生は，昨年度より30秒長い60秒の動画撮影，さらにクラスでテーマを決めてストーリーを組んだ。これにより，キャストとしての能動的な参加，登場人物や風景との対話，そして，他の班とのつながりを意識して，自分たちの作品に対して考える活動が進展した。
- ・中学校の先生方のみで，本プロジェクトについて話し合われる時間も多くなったと推察された。

(2) 結論と今後の課題

以上より，本研究では以下の結論を得た。

2018年度も，2019年度もともに中学一年生は「益城町，木山中のいま」を未来の生徒に伝える，という目標設定，30秒ワンカット動画をグループで作成するという表現手法により，生徒たちが「自分ごと」として能動的に授業に参加し，グループでディレクター，カメラマン，キャストなどの役割分担を行い全員参加で一つの作品をつくり，お互いの班の作品を見合うことで，自らの振り返りに活かしていることが分かった。また，2019年度二年生が取り組んだ，60秒ワンカット，クラスで5班の作品をつなぐストーリーづくりは，上記の工夫と効果に加え，現場の生徒以外の登場人物であったり，風景などとの関わり合いも撮影され，作品の一部となっていることが分かった。

故郷の風景は，自分たちが演じる「益城町の今」の舞台であり，撮影対象でもあった。

今後の課題としては，継続的な活動とするための省力化や環境整備，生徒の学びの個性に対する評価などが考えられる。

謝辞：本研究は多くの方々はその成果を追っている。まず益城町立木山中全校生徒，全教職員の皆様，他，益城町役場や地域の方々にお礼を申し上げる。また，復興は木山中からプロジェクトに関わって頂いた皆様，特に井下友梨花氏，森克彰氏，小山紀之氏らプロチームの他，ボランティアスタッフとして関わって頂いた皆様にも深謝申し上げます。記して謝意を表します。

参考文献

- 1) シビックプライド研究会：シビックプライド都市のコミュニケーションをデザインする，宣伝会議，2008.
- 2) 井形康太郎・田中尚人，地域学習における児童のシビックプライド形成に関する研究，土木学会論文集，D3，第75巻，第5号，pp.181-189，2019.
- 3) 菊池八穂子，当事者意識を育てる小学校社会科地域学習の単元開発－第3学年小単元「農家の仕事」を事例として－，名古屋学院大学論集 人文・自然科学篇，第53巻，第2号，pp.107-124，2017.
- 4) 鈴木亜弥・長尾徹，地域学習を支援する地域教材の提案－千葉県四街道市の地域カルタ「よつかるた」の提案－，日本デザイン学会第57回研究発表大会，2010.
- 5) 引地博之・青木俊明，地域に対する愛着形成の心理過程の検討，景観・デザイン研究講演集 No 1，2005.
- 6) 山内祐平・森玲奈・安齋 勇樹，ワークショップデザイン論－創ることで学ぶ，慶應義塾大学出版会，2013.
- 7) 前田康裕，まんがで知る教師の学び－これからの学校教育を担うために，さくら社，2016.
- 8) 前田康裕，まんがで知る教師の学び2－アクティブ・ラーニングとは何か，さくら社，2017.
- 9) 前田康裕，まんがで知る教師の学び3－学校と社会の幸福論，さくら社，2018.
- 10) 苫野一徳，はじめての哲学的思考，筑摩書房，2017.
- 11) 工藤勇一，学校の「当たり前」をやめた。一生徒も教師も変わる！公立名門中学校長の改革－，時事通信社，2018.
- 12) 佐伯胖・刑部育子・荻宿俊文，ビデオによるリフレクション入門 実践の多義創発性を拓く，東京大学出版会，2018.

(2020.8.31 受付)